幼児の教育　第93巻　第5号　平成6年5月1日（毎月1回1日発行）昭和23年3月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

お茶の水女子大学
平成
6. 3. 30
寄贈
附属図書館

1994

5

第93巻　第5号　日本幼稚園協会

子どもに生きた人・倉橋惣三

―その生涯・思想・保育・教育―

フレーベル館創業
85周年記念出版

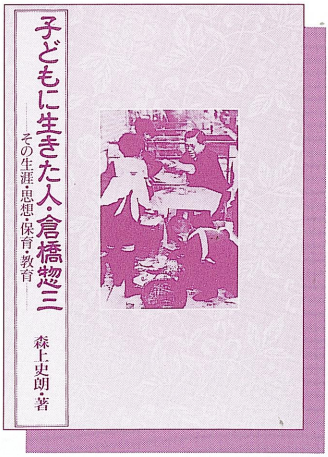
倉橋惣三研究の決定版！

◎写真多数　◎新発見の資料の紹介
◎完全な文献、著作のリスト
◎現代に生きる保育理論の解明

今ほど倉橋惣三の保育理論、教育理念を必要とされる時代はないと言っても差支えないであろう。この偉大な先駆者の汲めども尽きぬ先見性に基づいた理論と人間的魅力のすべてを解き明かした書を、保育界すべての方々におくる。

森上史朗・著

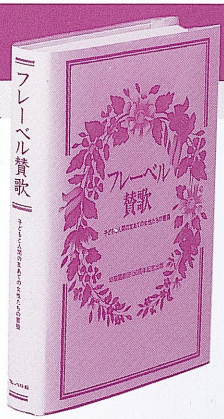
A5判・492頁・上製・定価3,800円（税込）



フレーベル先生・幼稚園創設150周年記念出版

フレーベル賛歌

―子どもと人間の友あての女性たちの書簡―



旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、バート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を越える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。

岩崎次男　他16名・訳

A5判・420頁・写真資料32葉・定価4,000円（税込）

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第93巻　第5号

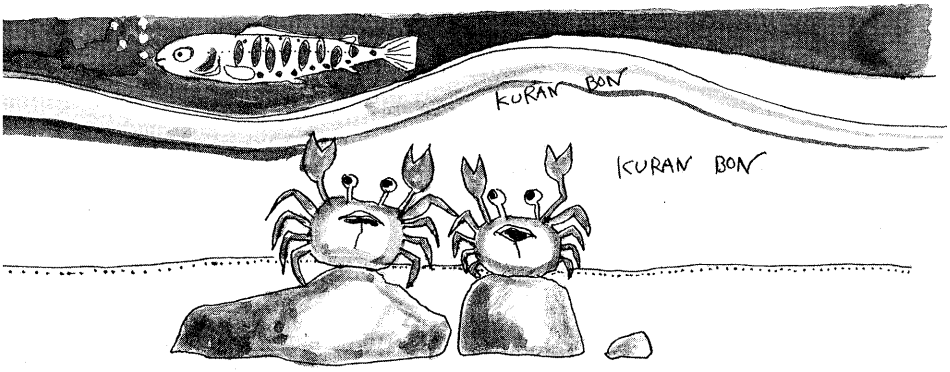
幼児の教育

――第九十三巻　第五号――

目　次

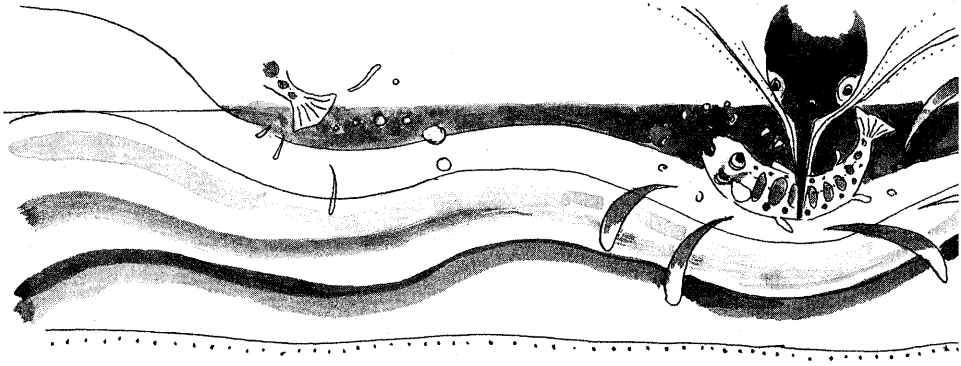
〈巻頭言〉子どもに生活の満足を……秋山　和夫…（4）
人間を育てる　～A子との十一年間～……津守　真…（6）
あそびの研究(1)
遊びの本性は何か……高橋たまき…（12）
寝ている蛇
～小さな遊びの中で一人一人に応じるということ～……豊田　一秀…（21）
あまり役に立たない読み物のページ
「端午の節句（せっく）」ってなーに？……K・M・H…（26）

© 1994
日本幼稚園協会



保育の現場では「子どもの日」をどの様に過ごしているか
～アンケートのこたえより～……編　集　部…（33）
私の子ども時代(3)
見詰めた時代　見詰められた時代……赤羽美代子…（37）
Kくんと私の一年（上）～非言語性LD児の記録～……植田　敦子…（44）
ある日の育児日記から(41)……佐藤　和代…（54）
オランダ便り
子育て事情　in　アムステルダム……向山　陽子…（55）

表紙・梅田　なほ／扉題字・堀合　文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・福田　理恵
編集委員・本田　和子／田代和美
桝田　正子・田中三保子
編集部・大沢　啓子



〈巻頭言〉

子どもに生活の満足を

秋山　和夫

新しい幼稚園教育要領や、小・中・高校の学習指導要領では、「学ぶことの楽しさ」や活動することの楽しさを、子どもに味わわせることを大切にしようとしている。

最近では、中学校、高等学校の学習指導研究発表会においてさえも、生徒が楽しく、学習に取り組み学校生活を送っていくために、このような工夫をしているといった内容の研究が発表されることが珍しくなくなった。

かつて、倉橋惣三先生は、「幼児に生活の満足を味わせる」ことが、幼稚園教育の本質であることを指摘された。これまで、小・中・高校などでは、勉強はつらくても我慢してするべきものだという考え方が一般であった。これに対して「学ぶことの楽しさ」を大切にしようとする学習観、指導観は、幼稚園教育原理が、小・中・高校へ上昇・拡大されていったと考えることができる。

このような事情のなかで、幼稚園や保育所で幼児が楽しく生活しているかどうかの点検は何よりも必要なことであり、幼児にとって楽しい生活の場としての園を充実させていくことが、保育者の責務でもある。

ところで、幼児が園で楽しく生活できる条件は何であろうか。

第一は、幼児の自発性・主体性が尊重されていることである。これが可能になるためには、幼児の好奇心が刺激されたり、活動意欲が高まるような、物的、人的な環境条件が必要となる。

第二は、幼児が「めあて」や「つもり」を持って行っている活動が実現できるような条件が保障されていることである。活動のめあてが実現された場合、幼児は成就感を味わうことができる。

幼児の現在の能力より高いレベルのめあてを持った場合は、そのめあての実現が幼児の自力では困難になる。この場合は、保育者の援助、助言、はげましなどが必要となる。

第三は、幼児の活動がマンネリ化することなく、新しい、しかも、質的に高いレベルの活動へと展開していくことが必要である。

第四は、友だちとの人間関係が円滑になされており、きまりを守る、役割をうまく遂行する、他人との協力の仕方などが上手にできる場合である。このために、日頃から幼児相互の人間関係づくりには、十分な配慮がなされておくべきである。

第五は、それぞれの幼児の長所や持ち前が保育者から認められており、友だち相互が、それぞれの長所の側面を評価しながらのつき合いが日常化している場合である。

保育者のみならず教師や大人は、一般に、子どもの短所や欠点を是正することに力を注ぐことが多く、そのことが子どものためなのだと考えている場合が多い。

子どもの短所や欠点は、保育者の方へ自然に姿を現してくる。しかし、長所や持ち前は、保育者の方へそのまま現れてきにくい。それを発見してやる努力が保育者に必要とされる。

援助するということは、幼児が楽しく生活できるための、保育者の配慮や働きかけであるとも言える。楽しい生活を送ることが、幼児の生活の充実、更には、望ましいパーソナリティーの形成に資することを忘れてはならない。

（岡山大学）

人間を育てる

～A子との十一年間～

津守　真

六年生のA子が二階から階段をおりてくるところに出会った。両腕にあき缶をいくつもかかえている。緑色のお茶の缶、褐色の烏龍茶の缶、ムーミンの絵のついたドロップの缶など、A子が選んだ好きな缶である。しっかりした自信のある足どりでホールの方に歩いてゆく。チラと私を見てゆくのだが、表情が豊かで可愛い。ごく小さいときに脳の手術を受けたこの子は、心で笑っていても、顔に表すことができなかった。それを私共はもどかしくまたあわれに思った。いまは心の喜びや自信が、丸くふくよかな顔の全面に溢れ出ていて、だれでもこの子が笑っていることを疑わないだろう。

A子は自分がきめたソファーの上や、テーブルの前に腰をすえると、缶を置いて、クレヨンやマジックで缶に線をかいたり、自分の爪を赤く塗ったりする。大人が通りかかると、ア、ア、と呼んで歌をうたわせる。その大人によって歌の種類が違うから、A子にはその人ごとに、曲のみでなくその人との感触の違いをたのしんでいるのだろう。実習生をふくめて学校中の大人たちのほとんど全員が、A子に呼ばれてそれぞれの歌をうたう経験をしている。そういうときに、A子はぴったりと顔を寄せて、全身で親しみを寄せてくる。

先日はトランポリンの上でいくつも小さなボールをいじりながらひとりで揺られていたとき、幼稚部の子どもが傍に乗った。そしてA子の両足の間のボールをひとつ取った。私はA子が怒るかと思っていたら、自分が持っていたボールをもうひとつその子に差し出したのである。小さなことであるが、それはA子には全身から溢れ出る好意のように思えた。こういうことが一日の生活の片隅にいくつもある。ひるのお弁当は、自分のクラスのテーブルで食べるのだが、そのときに、同じ六年生の格好の良い男の子の傍に弁当をもってゆくのだという。A子の中にいつのまにか育っている、異性の他者への関心に私はおどろかされた。

ときどき、一日だけの実習生がA子とつきあったとき、六年生なのにこんなことしかできないのですか、もうじき中学にゆくのにこれでいいのですかと言われることがある。第三者が、能力だけの視点からみたときには、そういう評価になるのかもしれない

し、もっと教育的観点からなすべきことがいろいろあるのに、と思われるのだろう。私はそういう見学者や実習生をみていると、最初の三十分程はA子はその人のことを相手にしていない。話しかけられても見向きもしないで、缶やマジックをいじっている。そのうち、一日一緒にいてくれる人と思うと、自分からその人の手を引いて、部屋から部屋へと学校中を歩きまわる。その人にとっては、ただぶらぶらと歩いているように思えるかもしれない。しかし、A子ははじめてのお客様を案内して、わたしはこういうところで毎日生活しているのですよと見せて回っているように私には見える。見学者や実習生は、一日だけのつきあいなのに、この子を指導しようと思ってみている。しかし、A子は幼児のときから十一年間この学校にいていろいろの時期を過ごしている。A子の方がこの学校の主人で、はじめて来られた方はお客様である。私はA子が客を案内しようという配慮をしているのを見て感心するのである。これは目に見える能力とは違って、長年の間、毎日人とのかかわりの中で育てられる人間性であると思う。

丁度この日、心障学級の卒業生を自分の会社で雇っておられる方から話を聞く機会があった。その子は日常の会話もできるし、読み書きもできる。しかし、数人しか社員のいない会社で、この子をいれてやってゆくのには、なかなかの苦労があるという。朝から機嫌が悪いことがしばしばである。そういうときには周囲も重苦しくなり、それをなだめながら仕事を進めてゆくのには、皆のひと方ならぬ努力がいる。また、人を自分よ

り上か下かで判定して見る。大学を出たばかりの今年入社した人は下で、給料を配る人は上である。だから新入社員は苦労している。この子が都立の養護学校の高等部を出てこの会社に就職してから三年間は、学校の先生が年に二、三度、見に来られた。先生がこられると、この子はいつもとは違ったいい子になる。先生は、この子が欠勤せずにうまくつづけているかどうかを見回りに来られるのであって、こちら側の毎日の苦労には関心がないようだと、その方は苦笑された。学校を卒業して後も、人間教育はつづけられるのであるし、学校にいる間にそれははじめられ、その基礎はつくられるのであることを私はあらためて考えさせられた。

A子が私の学校に来たのは二歳になる前だった。丁度私が大学を辞めて、現在の学校で保育に専念するようになった年のことである。そして今年十二歳だから、丁度私がこの保育の現場で毎日を過ごすようになったのと同じ期間を、この同じ場所で一緒にいたことになる。その間、幼稚部の年長と、一年生、二年生と三年間は、私はA子のクラスの担任をしたので、ほとんど毎日を一緒に過ごした。クラス担任をするということは、その子を守る者は自分以外にいないというような、思い上がった言い方ではあるけれども、それほどに実質的な体験をすることである。それは私にとってどんなに感謝しても尽くせない期間であった。この間にこの子は自分で立ち上がって歩くようになった。また、この間、学校に来てもほとんど一日中発作を起こしている期間もあった。そんなと

き、発作を起こしそうになると私の膝にすり寄ってきて危機にある自分の存在の支えを探し求めた。そして発作の間の意識の断絶にもかかわらず、意識を回復した次の瞬間にこの子は手を伸ばして手近にあるボールを摑もうとした。けれどもボールに指先が届く手前でまた発作が始まり、がっくりと身体が崩れるのだった。私は、身体の危機の中にあっても日頃の精神の能動性がはたらいていることを、そしておそらくそのことが身体の危機の時をも支えていることを感じさせられた。

母親は、A子の発作がつづく日々にも、休まずに学校に連れてきた。私は、どんなときにも「いま」を子どもと一緒に快く過ごすことの大切さを確認しつつ、毎朝この子を受けとることに喜びを感じた。後に、発作がほとんどなくなって、この子がいろいろの活動をはじめて、私共がついもっと多くのことを期待するようになったとき、このときのことを思い起こして心を引きしめた。

最近数年間は、担任もかわり、私とA子とのつきあいもへった。その間にも、小さな学校の中なので、一日のどこかで顔を合わせ、親しみを交す。小さいときにかかわった子どもには、大きくなっても特別の親しさを感じるのは当然であろう。しかし、小さいときのことを知らなければかかわれないわけではない。むしろ、過去につきあいがあっても、いまのつきあいは別である。大きくなったときのその子どもと、そのときの必要にこたえてかかわるのが保育である。その際、そのときの能力や活動だけに目を奪われ

ないようにして、互いに心の深いところで人間が育つようにかかわる。つまり、この点では、幼い子どもの保育も、大人になったときのかかわりも、共通なのだと思う。

この子どもたちとの十一年間の交わりの中で、私も人間として育てられてきたのだと思う。

A子は今年の三月に小学校を卒業して私共の手もとをはなれる。

（愛育養護学校）

あそびの研究(1)

遊びの本性は何か

高橋　たまき

古来、人間は自分たち自身をさまざまに定義づけてきた。賢い人（homo sapiens）、道具をつくる人、（homo faber）、遊ぶ人（homo ludens）、シンボルをつくる動物（symbolmaking animal）等々が、人間が自分たち自身に与えた特徴づけである。

本稿では、「遊ぶ人」としての人間の特質に着目し、とくに乳幼児期、児童期にある子どもにとっての遊びの、生物学的意味と文化的意味について考察する。

一　遊ぶ存在としての子ども

人間の子どもは、遊ぶ存在として生まれついているように思われる。路上で見つけた石のかけらを蹴飛ばして歩いたり、遊園地の砂場で砂の「プリン」を作って遊ぶ子どもたちの様子は、私たち大人にとって馴染み深いものである。子どもたちは、時間、空間、雰囲気が許されていれば、病気でもない限り、放っておいても自然に遊び始める。空腹になれば食べたくなり、活動を続けた後

には休息したくなるのと全く同様に、幼い子どもは、好奇心を駆り立てられると、遊びといわれる活動に入り込む。このように考えると、子どもの遊びには生物学的な意味があるように思われる。食べ物によって身体の発育が促進されるように、遊びの中には、身体と精神の発達の原動力が潜んでいる。遊びの中に、発達の原動力が秘められているという点については、ネコ、イヌ、サル等の高等哺乳動物の遊びに関しても言える。人間を含む高等動物は、大人になるまでに一定期間続く「子ども期」をもつ。この「子ども期」の遊びによって、高等動物の子どもたちは、狩りの仕方や、適切な身のこなし方に習熟する。さらに、サルのような群居動物では、仲間とのレスリングごっこや追いかけっこを通して、群れの中の社会関係や、群れのメンバーとの社会交渉のスキルを獲得していく。人間の社会は、あらゆる動物の中で、おそらく最も複雑で、入り組んだものであるから、ふり遊び（pretend play）や、ごっこ遊び（social pretend play）において、シミュレーションの形で、人間社会の複雑な相互関係を学習する意義は大きい。

例外はあるが、動物種が高等になればなるほど、子ども期が長い傾向にあること、この長い子ども期における遊びの量も多い傾向にあることは、念頭に置く必要があろう。そして、遊びが、該当種族のメンバーとしての適応力を獲得する契機を与えると言ってよい。

遊びが生物学的意味をもつとは、以上のことを指している。

二　社会の発展と遊び

エリコニン（一九八九）は、人類学者、文学者、旅行家など多くの人々による文献を総覧して、原始社会の子どもたちが、弓矢、鋤など、大人と同様の道具を使って、大人の生産活動に参加していたとの見解を導いた。原始社会の大人たちは、小型の道具を作って与え、子どもと一緒に活動しながら、生産手段についての教育を行っていた。子どもたちも、大人と共同の労働活動を楽しみ、元気潑剌と暮らしていた。たとえばマシン族の親

たちは、子どもが漸く歩けるようになると、自分たちと一緒に小船に乗せ、もう少し年長になると小さな櫂を作り与えて、船の漕ぎ方を教え、川の生活に慣れさせたという。また、ウルグイ族の子どもは、五～六歳になったばかりで、弓と矢を持ち、天幕の周囲を走り回って鳥を射止めた。

しかし、狩猟や農耕に用いる道具が複雑になり、狩猟・農耕以外の新しい産業も発生して、大人が使用する道具類は次第に複雑・多様なものとなって来た。これと呼応して、大人社会のしくみも複雑化した。こうなると、もはや子どもにとって、大人社会に入り込んで、大人と一緒の生産活動に従事することが困難となる。こうして、子どもたちは、大人社会から一部はじき出されることになった。その結果、大人になる迄の「子ども時代」が発生し、「子ども社会」が誕生したというのが、エリコニンの見解である。

「子ども時代」が発生したものの、母親たちは重い義務を遂行する必要があり、育児の時間が不足していて、子どもたちは放任されていた。その期間、四歳以前からすでに自立していて、時間の過ごし方や、食べ物の心配についてさえも、自分のことは自分でしていた。

時代が中世から近世へと進むにつれて、とくに都市の子どもには時間的、経済的なゆとりが生じた。ある社会の子どもたちは、働く義務から開放され、「子ども時代」の多くの時間が、子どもの自由に委ねられた。発達過程にある子どもたちも、何種類かの活動に従事するが、直接生産と関わりのない子どもの活動を、大人が「遊び」と称したとしても無理のないことであった。

ところで、人間社会はその発生以来発展を続け、文化を創造して来た。人は、前世代からの文化遺産を継承し、それを基礎にして新しい文化を付け加え、次世代へと伝承する。どの時代の子どもも、発展しつつある社会に生まれ、その社会の中で発達していく。このことは、人間の二重の発達―文化的発達と個体発達―を意味する。ここで、社会の文化が発展するにつれて、その社会に住む子どもの遊びも発達するのだろうか、という点に

関心が引かれる。遊びが個体の他の発達水準を反映するのと同様に、各時代の子どもの遊びは、その社会の文化発展水準を反映するのであろうか。この問いに答える歴史的資料にアクセス出来ないのは残念である。しかし、

Whitingら（一九六三～一九七五）による「六つの文化の子どもたち」プロジェクトは、間接的にこの問いに答えてくれる。Whitingらは、(1)ニャンソンゴ（アフリカのケニア）、(2)フストラウアカ（メキシコのオハアカ州）、(3)タロン（フィリピンのルソン島）、(4)タイラ村（沖縄本島東北部）、(5)カラプール（インド北部、首都デリーへ南90マイル）、(6)オーチャード・タウン（アメリカ東部のニュー・イングランド地域）の子どもたちを対象として、大規模な観察・調査研究を実施した。この研究の目的は、前記六つの地域に住む子どもたちの社会的相互作用を相互に比較することによって、それに対する文化の影響を検討することであった。社会的相互作用の中には、遊びを含む諸活動が含まれていた。三歳から十一歳の子どもたちの行動を、家や庭、牧場、学校や校庭、その他公共の場所で観察したところ、単純な文化（前記、(1)、(2)、および(3)の地域）に比べて、複雑な文化（前記、(4)、(5)、および(6)の地域）において「遊び」がより頻繁に観察された。逆に「仕事」は、複雑な文化

よりも、単純な文化においてより頻繁に観察された。このWhitingらの研究において、「遊び」のカテゴリーに入れられた活動には、系統立ったものも、構造化されていないものも含まれ、また、独り遊びもグループ遊びも含まれていて、遊びの内容については詳細を知ることが出来ない。

この点に関して、M.Mead（高橋、一九八四参照）が、マヌス島において、子どもたちの遊びを観察した結果は示唆に富む。Meadがこの島で四〇名の子どもたちの遊びを六か月間観察したところでは、走ったり、転げ回ったりの遊びは比較的頻繁に見られたものの、ふり遊びはほんの稀にしか観察されなかった。私たちは、ふり遊びをシンボル行動の端緒と考えるために、この型の遊びを、精神発達上の画期的な出来事の一つと考えている。

遊びの量が多いことと遊びの発達段階の間の対応関係については、慎重に考察する必要がある。それでもなお、遊びの量が多いことは、それだけ遊びに熟達する機会が増すことから、遊びの量と質の間に、一定の対応関係を想定してもよいであろう。

三　遊びの個体発達

大人が子どもの遊びに接する際の楽しさには、二つの側面がある。一つは、子どもの遊びそのものが面白いという側面である。大人は、子どもの遊びの言動にほほ笑み、時にはその巧みさに驚嘆して笑い転げ、遊びに没頭している子どもたちを逆に驚かせたりもする。二つには、誕生以来子どもが個体発達を遂げるにつれて、遊びの形態もまた発達するという側面である。発達研究の一環としての遊び研究にも、常に新しい発見の楽しみが存在する。遊びの個体発達を素描すると、以下のようである。

(1) ふりの発生まで

生後二～三か月頃、乳児は、特定の対象物や人物をじっと見つめ、またそれらに対して微笑するようになる。この時期の子どもにとって、吊りメリーや両親の顔

は、飽きることのない注意の対象である。生後八か月から一年の間に、対象物が自分とは独立に存在することに気づき、また、「物の永続性」の考えに到達して、今見ていた対象物が隠されると探すようになる。これと前後して、「人の永続性」にも気づくようになると、子どもは、「イナイ、イナイ、バア」の遊びを喜ぶようになる。母親の顔が、母親の両手や本やクッションの背後から現れると、子どもは喜び、声をたてて笑う。子どもは、人（母親）の永続性を信じ、信じたことが実証され、さらには「再び出現できる母親の能力」に満足する（Singer & Revenson, 1978）。

寝て過ごすことの多かった頃に比べて、這って生活空間内を移動するようになると、環境への働きかけの様相は一変する。子どもは、持ち前の好奇心を発動させ、家中を這い回って、興味を引く対象物を調べ尽くす。

二足歩行によって空間を移動出来る迄に発達すると、両手が移動行動から解放されるために、探索活動は一層効率的になる。這い這いでは、両手が移動と探索の双方に使用されていたのに対して、二足歩行においては、移動から解放された両手が探索のためにのみ使えるようなるからである。

二歳頃迄続く感覚―運動期の子どもは、対象物への運動的関わりから生ずる感覚の快を楽しみつつ、その物の物理的特性を認識していく。引き続いて、子どもは、対象物の「社会的性質」、すなわち、その物が具備する社会的な意味を獲得する（高橋、一九八九）。スプーンは食べるために、絵本は見るために作られていることを、子どもは日常生活の中から学ぶ。

対象物の「文字通り」の使い方を知ることが、ふりの行為発生の前提条件となる。

(2)ふりの発生と発達

「ふり」とは、日常生活における現実の対象物、人、出来事、状況が、別の対象物、人、出来事、状況に遊び的（playful）に変換（transform）されることである。日常生活におけるスプーンを「ロケット」に見立てるとき、子どもは目前のスプーンから「ロケット」の特

性を抽出し、あるいは、スプーンに「ロケット」の意味を付与する。こうして、スプーンをロケットの代用物として使用するとき、スプーンは「ロケット」としてシンボル表示されたことになる。先に、ふり遊びを「シンボル行動の端緒と考える」としたのは、この意味においてであった。

五歳児が、「お母さん」や「幼稚園の先生」の役割を引き受け、その行為を演ずるのは、「人の見立て」である。「人の見立て」においては、自分を誰か他の人物としてシンボル化するわけであるが、発達初期には、日常生活をする中で親しみと魅力を感ずる人物の役柄を演ずることが多い。行動半径が拡大し、また、テレビや絵本への接触も増えて、経験が蓄積されるにつれて、架空のキャラクターを演ずることも多くなる。興味をそそられると、子どもは、「ネコ」になったり、車の「ワイパー」になったりもする。

おそらく、当の子どもたちにとっても、観察する大人にとっても、最大の関心を引かれるのは、複数の子どもが参加して興ずる集団のふり遊び（ごっこ遊び）であろう。集団ふり遊びにおいては、多くの場合、一時に複数の物が見立てられ、子どもたちがそれぞれ異なる役割を分担し合い、一つひとつのエピソードをうまく繋いで、

まとまりのあるストーリーを編み上げる（このとき、出来事や状況の、日常とは異なるものへの交換が起こり得る）。

複数の子どもが一つのふり遊びに参加して、共同でストーリーを編み上げるには、自分の遊びのアイディアを、ことばや動作によって的確に表現し、また仲間からのことばや動作によるアイディアのメッセージを、正確に受け取るだけの伝達能力を必要とする。仲間のアイディアに基づいて、自分の次の遊びアイディアを生み出す協力の能力も要求されるのである。

遊びの中のコミュニケーションで注目してよいのは、メタ・コミュニケーションに関してである。「さあ、これからお誕生日のパーティに出掛けましょう」と言うとき、その発話は「遊びの枠内」で行われているのである。このメッセージの発信者は、声の大きさや抑揚、おおげさな身振りによって、今の発話は「遊びの中」の発話であって、「本当ではない」こと（メタ・メッセージ）を伝えようとする。メッセージの受信者も、それを「虚」と知って初めて、集団ふり遊びの場面が展開されるのである。仲間と共同の「虚」の世界をつくること、そして、その「虚」の世界の中で協力して行為することは、参加者たちに満足と喜びをもたらすのである。また、今の発話や身振りが「虚」なのか「本当」なのかを判断する瞬間は、子どもたちが、スリルの楽しみを体験する瞬間でもあるのだろう。

四　子どものふり遊びから大人の想像活動へ

子ども時代に、ふり遊びを通して培った精神活動―想像、シンボル操作、創造―は、それ以後表面下に潜んで、大人の精神活動の中で、機能し続ける（Singer & Singer, 1990）。Singer夫妻（1990）が多数の著名な作家について、伝記や自伝を収集して調べたところによれば、これらの創造性豊かな人びとは、幼児期に大がかりなふりの世界を展開していた。たとえば、トルストイは長い冬の夕方、ショールで肘掛け椅子を飾り立てて「乗り物」に変え、一人が「御者の席」に座り、もう一人が

「従者の席」に着き、女の子たちは真ん中に座って、三脚の椅子を「馬たち」に見立て……、「旅に出発」したのであった。

豊かな文化の中での、さまざまな対象物との体験や、周囲のいろいろな人びととの関わりの体験が、多彩な想像を育み、それが子ども時代の遊びとして開花する。このような想像は、後年の優れた創造の基礎となるのである。

（日本女子大学）

引用文献

1. エリコニン（一九八九）天野幸子・伊集院俊隆訳『遊びの心理学』新読書社
2. Singer, D.G. & Revenson, T.A. (1978) A Piaget Primer : How a Child Thinks. A Plume Book
3. Singer,D.G. & Singer,J.L. (1990) The House of Make Believe : Play and the Developing Imagination. Harvard University press
4. 高橋たまき（一九八四）『乳幼児期の遊び―その発達プロセス―』新曜社
5. 高橋たまき（一九八九）『想像と現実―子供のふり遊びの世界』ブレーン版
6. Whitihg, B.B. (Ed) (1963) Six Cultures : Studies of Child Rearing.John Wiley
7. Whitihg, B.B. (1975) Children of Six Cultures : A Psychocultural Analysis. Harverd University Press（名取敏子訳、一九七八『六つの文化の子ども達―心理―文化的分析―』誠信書房

寝ている蛇

～小さな遊びの中で一人一人に応じるということ～

豊田　一秀

一人の女児が家で教わったのでしょうか、長縄跳びをしたいと言うので、縄の片方を木に結びつけて、私は反対の片方を持って始めます。まだ回転する縄は跳べないらしく、ゆっくりと波のように揺らして欲しいと言います。その位の揺らし方でもまだうまくは跳べません。「蛇が揺れているみたいだ」などと言いながら私と二人で遊んでいると、興味を持った子どもが二、三人見に来ます。その子どもたちは長縄跳びが初めてらしく、「揺れている蛇」さえもうまくは跳べません。そこで、私は縄を揺らすことを止

めて、地面に伸ばすと「寝ている蛇です」といいます。子どもたちは止まっている縄をピョンと飛びながら、自分達が行ったり来たりすることを楽しんでいます。「蛇（縄）を踏みつけると蛇が起きてしまう」などと私が言うので、子ども達はスリルを味わいつつ注意しながら跳んでいます。その内に、子どもは五、六人に増えています。一人の子どもが「起きている蛇」をやって欲しいと言うので、私は「病気の蛇です」と言って縄をゆっくりと動かします。子どもたちは、起きだした蛇を踏まないようにしながらも面白そうに跳んでいます。その内に縄の動かし方が激しくなる毎に、「元気な蛇」「踊っている蛇」「怒っている蛇」などが発明されます。

こうしていろいろな縄の動かし方が工夫されていき、一人一人の子どもは自分が跳ぶ前に「～～している蛇をやって」と、自分の技量にあった縄の揺らし方を私に注文し、それを跳ぶことを楽しんでいます。

そのうちに年長児も見にやって来て、「大波小波」や「郵便屋さん落とし物」のようなもっと難しい跳び方も注文の中に入るようになります。「寝ている蛇」と「郵便屋さん落とし物」では技術的に大きな差があるのですが、皆、堂々と自分に合った跳び方を私に注文します。

できる子どもが自慢したり、できない子どもを馬鹿にしたりすることなく、また、できない子どもが恥ずかしそうにすることもなく、皆が自分の技量に合った跳び方を楽し

んだ和やかなひと時でした。

私はこの頃、子どもが友達と和やかに遊ぶのが以前より難しくなっているような気がします。子どもたちは、本人が自信を持っていることは自慢気に行いますが、その反対に、自信のないことは避けようとする傾向があるようです。人から評価されることが多くなったのでしょうか、自分がその事をできるかできないかが気になり、また友達がどうなのかが気になってしまうのです。

ちょうどそれは、小学校などでの体育の時間に、跳び箱の得意な子どもは喜々として誇らし気に行い、不得意の子はその時間が憂鬱になるというあのパターンに似ています。できる子の自信も、そしてできない子の自信のなさも、その課題をこなせているかどうかという同じ価値観に縛られた自己評価であることに注意しなければなりません。

いわゆる教科教育においては、前もって教師の価値に従ってカリキュラムを作ること、そしてそれを課題として子どもに与えることはごく普通に行われていることでしょう。技能の習得と、それに伴う達成感を体験させることに主眼においた場合、それは効率的な指導方法と言えましょう。その中では、友達と競い合うことも学習への動機付けとして用いられます。しかし、遊びは教科ではありません。人から与えられた課題よりはむしろ自分の心に湧き起こった興味を、人からの評価よりも自己満足を、結果よりは

過程を、それぞれ大切に考えるのが遊びです。

この日の長縄跳びがなぜ技能の差を越えてみんなで楽しめたのでしょうか。いくつかの要素を考えてみたいと思います。

第一には、参加した皆がその遊びに興味をもって、自らの意思で遊びに入っていたという前提を思い起こすことが大切です。（参加しなくてもよい自由も当然あるのです。）第二に、技術的には差があっても、自分は跳べるという喜びと自信に関しては皆同じであったからではないでしょうか。第三として、跳び方を子どもが選べることで、子どもが自分の技量を友達と比較したり、教師に評価されたりする必要がなかったからではないかと思います。保育者の出す課題に子どもが応えるのではなく、その反対に、子ども一人一人の技量に従った様々の要求（この場合は縄の揺らし方）に保育者が応えることで、子どもがその遊びを課題として感じる必要がなかったのだと思います。

子どもは本来穏やかなものだと私は考えます。自分にゆとりがあり、自分を信頼できているならば、人と自分を比べて人や自分を責めたり、自分を守ったりする必要もないでしょう。その意味でも幼稚園に於て保育者は、一人一人の子どもがそれぞれの心と身体の育ちに従って生活できるように配慮することが大切です。このことを言い換えるならば、子どもが自己信頼感を持てるように援助することが、幼稚園の大きな役割であると言ってもよいかと思います。そのように考えたとき、子どもの気持ちの流れに付き合

う保育者の存在と、子ども自身がゆっくりと過ごせる時間とが、子どもの心身の育ちを支えるものとして非常に大切であるということに気付かされます。

何が人を穏やかにするのかと考えたとき、それはおとなも同じなのかも知れません。

（元・お茶の水女子大学附属幼稚園）

あまり役に立たない読み物のページ

「端午の節供（せっく）」ってなーに？

K・M・H

「端午の節供」って、「こどもの日」のことですか？

いいえ、違います。実はその逆なんです。第二次大戦後の一九四八年、新しく「国民の祝日」を定める法律に従い、かつて「端午の節供」が祝われていた五月五日に、「こどもの日」を祝うこととされたのです。「延喜式」（九〇五～九二七）と呼ばれる日本古代の法典のなかに、「節会（せちえ）の制」という重要な祝祭日に関する細則があります。そこには、五節会の一つとして「端午の節会」が記載されていますから、「端午の節供」は、非常に古くから祝われていたということになりそうです。

ところで、「端午の節供」とは、一体、どんな特別の日だったのでしょうか。伝統文化の理解などと、おおげさに構えるつもりはありませんが、まあ、時には、こんなことを振り返ってみることも無駄ではないでしょう。

さて、まず「端午」という言葉を、百科事典などで引いてみます。と、「端」は「初」の意で、月の最初の午（うま）の日のこと、五月が午の月であることから、三世紀ころから中国では五月五日に各種の祭礼が行われるようになり、これが、「端午の節供」の始まりであるなどと、記されています。さらに、長い長い詳しい説明が、中国の場合、朝鮮の場合、そして、我が国の場合と続くわけですから、どうやら、東アジア一帯に広く伝わって来た風習であるようです。明治以降、政府の定めた祝祭日法によって曖昧にされてしまった「端午の節供」という祝い日が、こんなにも長い歴史に支えられていたことに、私どもは驚きを禁じ得ないのではないでしょうか。

旧暦の五月は、高温多湿の盛夏であり、伝染病や害虫の被害が甚だしく、「悪月」の一つでした。つまり、邪霊の跳梁する季節ということのようです。この日に、蓬などの薬草を摘んだり軒先に菖蒲の葉を下げたり、あるいは、鍾馗様の絵を飾ったりするのも、すべて、邪悪な霊の侵入を防ぐ呪いだったのでしょう。『日本書記』にも、邪気を払うために菖蒲を軒に吊るしたと記載されています。現在、「こどもの日」の前日くらいから、花屋さんでは花菖蒲が、八百屋さんやスーパーマーケットでは菖蒲の葉が売られています。そして、私どもは、家の中にそれを飾った

り、菖蒲湯をわかしたりしますね。これらの風習は、「こどもの日」に由来するというよりも、より古い「端午の節供」の遺産と言うべきでしょう。

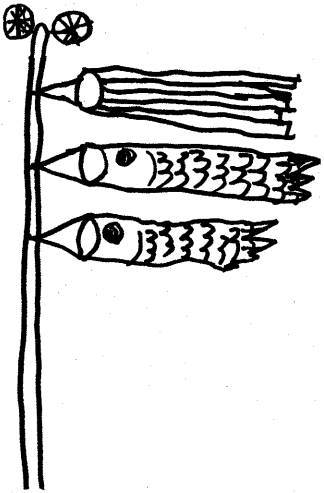
◇

ところで、ここで一つ、不思議なことに気付かされます。すなわち、邪気・邪霊を払うための「端午の節供」が、いつ頃、なぜ、男の子の祝い日に変わってしまったのでしょうか？

五月五日には、鯉幟を立てて武者人形を飾り、男の子の初節供が盛大に祝われます。それに、室町から江戸前期までは、この日に、「印地打ち（いんじうち）」と呼ばれる勇壮な石合戦が行われたりして、何とも、男っぽい一日でした。こうみてくると、五月のお節供は、いかにも「男児専用」に見えるのですが、しかし、民俗学の研究者たちは意外な事実を伝えてくれます。かつて、この日の夜は、「女の夜」と呼ばれていたのだと……。

近松門左衛門の『女殺し油地獄』のなかに、「五月五日の一夜を女の家といふぞかし」という有名な一節があります。端午の節供のために屋根に菖蒲を飾ったその家が、「女の家」と呼ばれ、その夜のことを「女の夜」「女の天下」と呼んで、女性中心に一時が経過するという風習が、かつては広く全国に分布していたと言われます。間もなく訪れる田植えの時には、女たちは「早乙女」として重要な役目を担わされます。農作業が深く信仰と結び付いていた時代には、その日々に

備えて、女たちは特定の家に忌み籠もって精進し、田の神を迎える準備をしたことでしょう。従って、「女の家」はその忌み籠もり場の名残り、「女の夜」の振る舞い事は田の神をもてなす行事の名残と、考えることが出来るとされるのです。そう言えば、比較的最近まで、五月五日が「女節供」と呼ばれていた地方もあるとか……。



とすれば、女の日が男の日へと、アッサリ逆転してしまったのは、なぜなのでしょうか。逆転の理由は、正直のところ、明確ではありません。ただ、三月三日の「上巳の節供」が、女の子の「雛祭り」として庶民層に定着していった動きと連動するものと、考えることが出来そうです。江戸中期以降の都市の勃興、とりわけ、豊かになった都市町人の暮らしぶりと生活感情がこの動きを促進したことも確かでしょう。

「雛祭り」は、中国伝来の三月上巳の行事と、日本古来の人形によって穢れを払おうと

する信仰が結び付き、江戸時代に五節供の一つに加えられました。もちろん、初めは、雛人形を壇飾りで飾り付けるやり方は、一部上流貴族のものでしかなかったのですが、豊かな町人の出現に伴い、徐々に庶民層にも広がっていくのです。人形は、本来は、人間の穢れを肩代わりする呪具でもあったのですが、同時に、古くから、貴族の少女たちの遊び道具でもあったようです。『源氏物語』のなかにも、幼い若紫が人形遊びをする姿が、愛らしく描かれていますね。従って、美しい人形を部屋一杯に飾って祝うこの日が、女の子のための祝い日として定着していくのも、当然の流れでしょう。

それに対抗するかのように、「端午の節供」が男児向けに整えられます。先に見てきたように、この日は、農作業との関連では「女の日」でありながら、一方では、邪気・邪霊を払うこととの関連でもあるのか、宮中では「騎射（うまゆみ）」が行われ、民間では「印地打ち」や「菖蒲打ち」など勇壮な行事も行われていました。これら上流貴族や武家に由来するとされる風習は、人形を飾るのに比して明らかに男性的、従って、女の子の「雛祭り」に対抗して男の子向けに取り入れられるのに格好だったのではないでしょうか。

そして、ここには、男女の養育を、ハッキリと区別して行おうとする考え方も投影されています。「男女七歳にして席を同じくせず」などいう、儒教モラルに基づく武家社会の規範が、形を変えつつ庶民層を絡め捕っていく経緯を見ることも、可能かも知れません。

『幾利茂久佐（きりもぐさ）』（一八五七）は、長野地方の様々な風俗の記録された文書ですが、このなかに、次のような一文が含まれています。すなわち、男の子のための「端午」の行事は祖父や父の時代にはなかったらしい、しかし、自分は祝って貰ったと……。そして、家の外に小旗を立て、槍や長刀など本物の武具を飾ったと記されています。さらに、長男は、色々な贈り物などもあって盛大に祝って貰えるが、次男以下は、父の手細工の紙幟だけだったということ、また、町家では、内飾りといって幟も家の中に飾るようになったので、邪魔にならずに結構であるなどと綴られていました。幕末の男の子向けの「端午」風景が想像される一文です。

◇

一九三六年、恩賜財団母子愛育会（現在の愛育研究所の前身）は、民俗学者柳田国男の企画・立案に基づき、柳田の高弟橋浦泰雄を中心として、妊娠・出産・育児に関する伝統的な習俗の大規模な全国調査を行っています。そのなかに、五月のお節供に関する調査項目も含まれていました。それらを見ると、昭和のこの時期に、この日は概して「五月の節供」と呼ばれていますが、なかには「端午の節供」と呼んでいる地域も混じっていました。「初節供」ではなく、「初端午」という具合です。

お祝いの中身としては、里方から贈られた鯉幟や武者人形を飾り、かしわ餅やちまきを配るというのが多いようです。しかし、静岡県や愛知県からは、最初の男児の初節供には、凧を上げて祝う「初凧」と呼ばれる風習

が報告されています。さらに、先に引いた『幾利茂久佐』の場合と同じく、「五月の節供」を盛大に祝うのは長男だけという報告が、割と多くの地域からなされていました。次男・三男は、幟を立てないとか、あるいは内祝いしかしないなどと、ちゃんと断ってあるのもありました。

とすれば、幟を立て武者人形を飾るこの行事は、男の子一人一人のものではなく、「家」の繁栄のためということだったのでしょうか。そう言えば、「幟」とは、本来は「忌み籠もり」の場であることを記す標識であるとされ、また、神の降霊する依代（よりしろ）ではないかとも言われています。この場所で、いま、神を迎える準備が整えられていると、神に知らせるための目立つ標識、それが「幟」の起原ということなら、個々人のものであるにまして、その家のものと考える方が理に叶っているのかも知れません。そして、少なくとも、昭和の初めころまでは、そんな古い伝統や信仰が、色々な行事の背後に、ひっそりと呼吸していたということでしょう。

さて、新しい時代は、こうした背景を持つ五月五日を、「こどもの日」と命名して、国民皆の祝う祝祭日と定めました。年に一度くらい、子ども中心の祝い日があってもよいということでしょうか。そして、日本のこの祝祭日を、「子ども尊重の現れ」と感嘆する外国人もあるとか……。そんなに誉められると、何となく照れてしまいそうですが、まあ、折角の休日ですもの、それぞれのやり方で大切に過ごそうではありませんか。

保育の現場では「子どもの日」をどの様に過ごしているか

～アンケートのこたえより～

編集部

五月五日は「子どもの日」。〝こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する〟という主旨で作られた国民の祝日です。

子どもが主役である保育の現場では、「子どもの日」がどの様に考えられているのでしょうか。自分達の園ではこうだが、他の園ではどう過ごしているのか知りたい気もします。

そこで編集部では、本誌に執筆いただいた幼稚園、保育園、養護学校の先生方に、それぞれの現場での「子どもの日」の過ごし方をうかがいました。アンケートの形でこたえていただきましたが、ここでは、統計的なことはあまり意味のないことですので、おこたえの中からいくつかをまとめて、ご紹介いたします。

◇「子どもの日」をどの様に過ごすか

五月五日はゴールデンウィークに重なり、休園ということで、どの園も、その前後で何らかの子どもの日らしい活動を行っているということです。具体的には、

○　こいのぼりを飾る

○　武者人形、のぼりや武具、太鼓等を飾る

○　花菖蒲などを作って飾る

等、伝統的な〝端午の節供のお飾り〟で雰囲気を作っている園が多いようです。園によっては昔から伝えられた武者人形等を飾るところもあれば、子ども達の手作りのこいのぼりを空におよがせるところもあり、飾り方は様々ですが、それぞれに子どもの日を祝う気持ちがこめられている様です。

日常の遊びの中で、子どもの日にちなんだ活動をとり入れた保育をしている園もたくさんあります。

○　こいのぼりやかぶと、花菖蒲などの製作

○　おもちつきをしたり、柏餅を作ったりしてみんなで食べる

製作は、園全体で取り組んだり、クラスのものを作ったり、個人で作って持ち帰ったり、たくさん作る子がいたり、作らない子もいたり、と各園各様です。時期的に新学期が始まって日も浅い時なので、まだ生活になじめないでいる子ども達にも、みんなで作る充実感や、自分にもできたという満足感などが味わえるきっかけにもなっているということです。

柏餅をみんなで食べる園も多く、市販の柏餅だけでなく、おもちつきや、園庭の柏の葉やよもぎで手作りをするという園もありました。この他、

○　子どもの日についてのお話をする

○　季節の歌をうたう

○　記念撮影をする

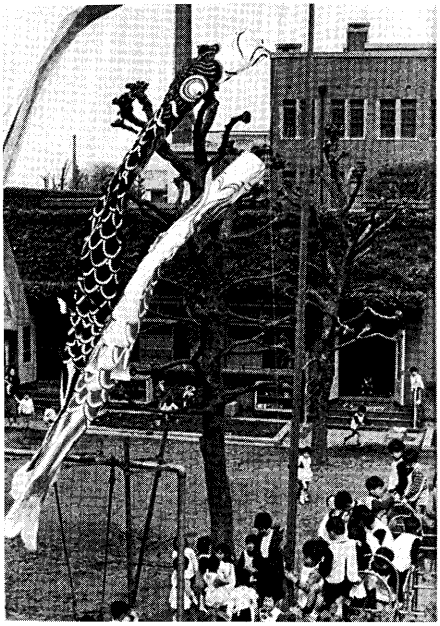
○　行事としてミニ運動会や、ゲーム大会を行う

等、具体的なことがらが報告されました。中には、連休中は家庭によって過ごし方も様々なので、休みあけに子ども達の話をきく、という園もありまし

た。きっと楽しい話がたくさんきけるのでしょう。

◇ 園生活に「子どもの日」をどう位置づけているか

先程も書きましたように、新学期開始間もない時



『お茶の水大附属幼稚園の生活』より

ということで、どの園も、無理なく子ども達が過ごせるような保育内容を工夫しているようです。歴史の古い幼稚園の中には、無理のない過ごし方の中にも、日本文化を継承する意味で、意識的に子どもの日・端午の節供を節分や七五三、ひなまつりや他の伝統的行事と同様にとり上げている園もありました。以下、園の生活にこの「子どもの日」をどう位置づけているか、何人かのおこたえの中から、紹介いたします。

○ 「子どもの日」として特別に生活の中には入れていないが、〝子どもの日〟なのであっさりとしている。 （J幼）

○ 季節感や伝統的な日本の行事を願いつつも、ともすると商業ベースにのって、その季節になるとどこも同じ様なイベントになってしまう今日、ささやかであっても、子どもが自分たちの思いや力でできる範囲のことを大人がサポートするという形で、年ごとに工夫して行っている。 （S_1幼）

○　子どもの成長を祈ってという昔からのシンプルな願いを表している。　（T保）

○　鯉の様に生き生きと元気に動くことを願い、五月に運動会を行う。　（S養）

○　行事は子どもの生活の流れのエポックメーキングの役もあるものかと思うが、ただいかにもしくまれたという形でなく、子どもの健やかな成長を願う大人の心持ちを子どもの日常のふつうの生活の中にふくめたいと思う。　（O_1幼）

○　新入園の子どもが保育者とゆっくり活動する場所にしている。　（M幼）

○　空におよぐこいのぼりは子どもの心を解放する。　（H保）

○　これをきっかけに子どもの成長をたしかめたい。ひなまつりは全園で、子どもの日は学年単位で集まって遊ぶ。　（S_2幼）

○　「私たち大人は、あなたたち子どもを愛してるよ」という思いを伝える日。　（S_3幼）

○　園周辺に残された自然や昔ながらの生活習慣を子どもに知らせながら行事を楽しむ。子どもがする行事にしたい。　（O_2幼）

○　子どもの日といっても子ども自身には実感のないものかもしれないが、この季節の行事として位置づけ、それが長い年月のうちに自分自身の中に「子ども」の意味が判っていければよいと思う。　（K幼）

新学期が始まり、子ども達の生活もだんだんと落ちついてきたこの時期、季節は春から初夏へ。空をおよぐこいのぼりを見ながら……、今年の「子どもの日」はどう過ごしましょうか。

私の子ども時代(3)

見詰めた時代 見詰められた時代

赤羽　美代子

私は、東京の港区麻布に数百年程居住する旧家に、一九二九年、八人兄姉の末子として生まれた。生後間もなく里親の元で育ち、小学校就学迄、ひとりっ子として育っている。

養父の勤務の為、五歳の時に都下の保谷市に養父母と共に転居する。当時の保谷市は、駅前が少々の商店街の他は、広びろとした畑であった。

保谷市に着いた日、車から外に出た私は、突然、春のむせ返る土の香が、キーンと鼻を突き、鼻孔がピタッと張りついてしまった。この、突然の呼吸困難が、何がどうしたのか理解できぬまま、急ぎ車中に逃げ込む。

その時、車の窓より眺めた自然界が、生まれて初めて身に触れた、本当の春の姿の様

に思えた。それは一幅の初春を画いた絵の様な景色が、のびやかに、うららかに、私の眼中いっぱいに広がった。

◎ 弾丸お結び

保谷に転居してから、すぐに、近辺のお百姓家の腕白小僧たちと友だちになった。見る事、聞く事が私を夢中にさせ、心も踊り、身も踊って、一日が遊び暮れた。五～六名の遊び仲間のガキ大将は、トシ坊である。トシ坊の表現方法は、少々荒っぽいが、心優しい正義の見方、頬の赤い六歳位の男児である。

或る日、「東京のお嬢ちゃんに、内の小豚を見せてやる！」と、トシ坊の一言に、私はトシ坊にしっかりと手を引かれ、畑の中の一本道を、腕白たちとワーワーと真っしぐらに駆け出した。養母には、自分の行き先を告げずに行く事に、後ろめたさを感じながらも、「すぐ帰るから、すーぐに帰るからね」と、自分に言い聞かせ、腕白たちに遅れまいと、トシ坊の家に急いだ。途中、「東京のお嬢ちゃんが疲れるから、今から、ゆっくりと歩け！」との、トシ坊の命令に、腕白たちは、私の歩幅に合わせて歩く。程良い時に、「それ！」の、トシ坊のひと声に、馬の調教よろしく、全員カッポカッポ、ワーワーと駆け出す。

全員の疲労感、程良い時を心得て行動するトシ坊は、リーダーの資格十分である。

トシ坊の家に着く。薄暗い土間で、トシ坊のオバさんがお結びを握っている。オバさん

の数本の指には、絆創膏がペタペタと張りついている。ニギニギ、グニャグニャと、確かなリズムでオバさんの掌中で繰り返されて、お結びが握られていく。たちまち、弾丸の様な大きな御飯の固まりが握られた。私には、ニギグニャの音が、私の五感に何とも気持ち悪く響いた。腕白たちは、いつになく静かに、オバさんの手許を見詰めて、順番を待っている。オバさんは自分の手の平に、生味噌をピチャリと塗ると、お結びを、掌中で器用に白と茶のまだら色に変化させた。

やがて腕白たちは、口一杯に、白と茶の弾丸を押し込み、にこにこと食べ始める。

私は、弾丸を乗せたお皿を両手に持ち、途方に暮れた。「こんな気持ちの悪い物は食べられない。でもオバさんに悪い」と、思えば思う程、弾丸を見詰めた目から、涙と鼻が湧き出てくる。養母にだまって来た罰が、早くも当たってしまったかと、一層悲しくなった。

トシ坊たちは、私の姿に驚き、「食べても良いんだぞ！」と、わめき出した。オバさんも驚いて、「東京のお嬢さん、もっと味噌つけた方が良いのか！」私は慌てた。「お母さんに見せてから食べる」「こんな物、見せなくてもええよ」私「持って帰る」。オバさんは「そんなら包んで上げるから」と、すすけた竹の皮を、自分の汚れた前掛けで一拭きすると、更に弾丸の上に生味噌をピチャと乗せる。新聞紙に包み込み、トシ坊に持たせた。

腕白たちは、私を真ん中に挟み、ワーワーと畑の一本道を駆け出し、我が家へと急いだ。トシ坊の手には、オバさんからのお土産が、しっかり握られている。

既に、太陽が西の空へ傾き始め、夕焼けが美しかった。

保谷時代の私は、近辺のオジさん、オバさん、腕白たちから、「東京のお嬢ちゃん」と言う名を頂戴し、我が家近辺の、アイドル的存在であった。

過去の栄光は、再び返らない風と共に、吹き抜けて行った。

◎ ギンギンギラギラ、夕日が沈む

或る日の夕方、朱色に輝き、真ん丸に脹らんだ大きな太陽が、目の前の地平線に堂どうと静かに沈んで行く。

鳥たちが、太陽を追い駆けて、夕日の中に消えて行く。

私には、太陽が、すぐ目の前に見える地平線の向こうに落ちて行く様に見えた。太陽がどの様に転がっているのか一目見たかった。「見なければ！」と、気持ちが熱してきて、私は地平線に向かい、一生懸命に畑の一本道を駆け出した。見て来た事を、友だちにも、家人にも話して聞かせたかった。

幼児の足でどの位、駆けたり歩いたりしたのか、やがて太陽がすっかり沈み、あたりは黒一色の闇となる。

やがて後方で、沢山の提燈の灯が、私の名を呼びながら、右に左に揺れて近づいて来る。五歳児の私は、そんな時にも、太陽を捜す仲間がふえたのかと大喜び。「こっちよー！」と、後方の提燈に手を振り、提燈たちを太陽迄誘導する為に駆け戻った。

その後、この件について、誰からも叱られたり、注意を受けた覚えがないのが不思議である。が、あの時、自然界の仕組みを科学的に教えを受けていれば、一人前に、利発になっていたのでは、と、苦笑いをしている。

◎ 歴史を創ってしまった、小学生時代

七歳の時、小学校入学の為、私は生家に戻る。夕食後は、長姉が私たち兄姉に、本を読んで聞かせる時間である。食後、早速にその準備を始める。我が家の新参者で一番チビ娘の私は、先ず座蒲団を五枚程、重ねて置く。次に、卓袱台（ちゃぶだい）の上にお茶と長姉の好物の狸煎餅を器に盛る。全員の人数の枕を並べる。準備完了。長姉が牢名主の様に、積み重なった座蒲団の上に座すと、私たちは枕にごろりと横になる。本を読む姉の美しい声、歯切れ良い語調の調べに静かに聞き入る。途中のお茶タイムには、新参者の私がとび起きて、お茶を入れ、長姉が、ポリポリとお煎餅をいただく口元を見詰めたり、兄姉方が本の内容について語る話に耳を傾ける。

小学校の歴史の時間には、先ず先週に習った内容を、級の皆に私が語る役を務めていた。先生は必ず「美代子さん、先週はどこ迄、話しましたか」「ハイ」、私が語り出すと、級がしーんと静かになり、私の話に涙を流したり、鼻を擤んだり感動して聞いてくれる。私は語りに調子が乗ってくると、姉が読んだ文学の中の、メインらしき人物が、私の語りの中に出没する。宮本武蔵らしき人物、戦争と平和、風と共に去りぬ、若草物語の中の登

場人物らしき人びとが、自由自在に私の歴史の中に、出たり入ったりする。

終わり迄、私の話に静かに耳を傾けて下さった先生は、最後に必ず、こう締め括って下さった。「美代子さん、文学や小説は創作する物、歴史は創作する物ではありませんよ」私は「ハイ」と返事をして、着席する。

風邪で学校を欠席した日は、学友たちが学校の帰り、我が家に立ち寄り、今日一日の出来事を話してくれる。特に歴史の時間、先生が「美代子さんが、いないと淋しいね。と、話された。私たちだってとてもつまらなかった」と学友たちは話す。私はとたんに、日頃の先生の御注意をも顧り見ず、「そーかー。私がいなければ、歴史を創る人がいないんだー。早く風邪を癒して頑張らなくちゃー」と、武者震いをしたものだ。

◎ 父の後ろ姿

一九四四年、東京空襲も激しくなり、我が家も焼失する。

五月二十五日、港区も激しい爆風に煽られ、炎色と煙色に天も地も染まってしまった。

我が家族も、防空壕を出て、他に避難する事となる。当時、我が家には、焼け出された親戚の子どもたちが、三名程、来ていた。

防空壕を出る時、父が一本の綱を私たちに持たせ「この綱を決して離してはいけない。どんな時も、しっかり握っていなさい」と言い、父が先頭に立つ。母は最後の綱を

握る。

私の父は、麻布界隈では、大酒豪で通っている。お酒が身体に入っていない日はない。私たち家族、母以外は親戚に至る迄、真正面の父の顔、姿を、まともに見たり、父と話し合った者は、いない。

父を思い出す縁(よすが)は、此の空襲の夜、綱を握って子どもたちの先頭に立ち、台地を踏みしめて、火の粉が飛ぶ中を前進する、父の後ろ姿のみである。その夜、綱の前、後で両親が間断なく子どもたちの名を呼んだ。「ハーイ。ここにいまーす」と、私たちは必死に返事をし、互いに確認をし合った。爆風に吹き飛ばされそうな痩せた父の後ろ姿、無事な場所を捜し求めている父の後ろ姿を目詰めて、父に続いた。煙で目があかず、防空頭巾が頭の横にずれた。片目のまま、しっかりと父から目を離さなかった。真剣に父を見詰めた、只一度の父との接触の時であった。

この日、私たちは短時間で父の一生分の、後ろ姿を見詰めてしまった。燃え盛る炎の明かりの中で見詰めた、強烈な父の思い出である。

其の後、父の子どもたちが父を語る時は、顔のない、声の無い、父の後ろ姿を語り合う。前向きの父を語る時には、一同の口がへの字に曲がり、目が三角になると言う現象が発生する。

毎日を幼児と共に過ごす私だが、私の幼児時代の過ぎ越し方が、「私の保育」を太らせているかな？　と、思える瞬間が時どきある。

（元・霊南坂幼稚園）

Kくんと私の一年(上)

～非言語性ＬＤ児の記録～

植田　敦子

一　最初の出会い

私がKくんに最初出会ったのは、昭和も終わろうとしている年の秋、就学時健康診断にてであった。

「億万点取る、億万点取る！」

と叫んで知能テストの教室に入って来た。彼を見て、私と先輩のN先生は苦虫をかみつぶしたような顔で見つめ合った。知能テストは十人ひと組で行われていた。他の子どもへの影響が心配されたので、N先生にテストをまかせ、私はKくんの席の横につくことにした。それもティッシュペーパーを片手にしてである。なぜかと言うとKくんは近頃の子どもにはめずらしく鼻がたれており、それも想像を越える長さにまで伸びるのである。後に、それは反回神経マヒのためであると分かったのだが、とにかくその時は絶えず鼻をかませていなければならなかった。

テストが始まった。Kくんは、例の〝億万点取

る〃を繰り返しながらも正答を重ね、それもすばやく反応するので私達は驚いた。私は、（ははあ、この子は幼稚園時代に秀才教育を受け、今日はお母さんに〃大切なテストだから億万点取るように頑張っていらっしゃい〃と言われたんだな）と思った。しかし、答をすばやく見つけ出すのはいいが、それを叫ばずにはいられない様子には閉口した。ほめたり叱ったり、しいっと言ったり口をふさいだり、その上鼻をかませたりで、Kくんが退出する時には二人とも、どっと疲れてしまった。そして、私達は彼のカードに、そっと〃落ち着きのない子〃と印した。

一連の健診が済んだ後、Kくんの母親と校長先生との教育相談なるものがあったようだが、どんなやりとりがなされたのか、私は知らない。

二　縁あって一緒のクラスに

私は平成元年度、一年を担任することに決まっていた。校長先生と担任三名との相談の後、二組の児童カードの入った封筒を渡された。あけてびっくり、なんとその中にはKくんの名前が入っていた。忘れもしない、あの子の名が。

四月六日、入学式の日、私達一年の担任は体育館で新一年生と対面するのを心待ちにしていた。来た来た、まるで紳士、淑女のように着飾った子ども達が。〃さいたさいた〃の音楽に合わせて足取りも軽く、自分の席をめざして花道を歩いて来た。私は、殊に黄色い旗の後ろに続く二組の子ども達を見守っていた。

式が始まり、校長先生の挨拶が始まった。

「みなさん、おめでとう」

と、校長先生。するとすかさず、

「ありがとうございます」

という声。何と、あのKくんが起立して叫んでいるではないか。私は苦笑した。（まあ、子どもらしくていいか）などと思いながら。しかし話が進むにつ

れ、体育館はがやがやしてきた。
「この指はなんという指でしょう、そうですね、お父さん指ですね」
と、校長先生。続いて、
「そんなこと知ってるわい」
とKくん。最初の礼儀正しさはどこへやら、段々、言葉遣いが悪くなり、体を左のお友達の方に倒したり、右のお友達の方へ倒したり、行儀も悪くなった。そして最後まで叫ぶのをやめなかった。私はおもしろがり屋なので笑いが止まらなかったが、先輩の先生達は前代未聞の入学式と言って同情を寄せてくれた。
式後、二組の子ども達は私の後に続いて教室に戻った。〝あしたから先生と一緒に元気にお勉強しましょう〟といった型通りの挨拶をしてから、記念撮影のために校庭へ出た。
昇降口のところでKくんの母親と初めて話をした。
「先生、どうしてあんな風になっちゃったんでしょうか」
と、いささか不安気の様子だったので私はともかくも、
「慣れればだいじょうぶですよ」
と、にこやかに言っておいた。私の目には、興奮してお調子にのっているだけのように見えたので。母親は、続いて反回神経マヒという病気にかかり、赤ちゃん時代に死線をさまよったことがあること、そして鼻が出るのはそのためであることを述べた。
記念撮影も終わり、一人二人と、私と丁寧な挨拶をかわしてお別れしていく中、遠く、赤や黄色のチューリップと共に写真をとっているKくんの姿が目に入った。胸をはって、口をぎゅっと結んで。赤い蝶ネクタイをした彼は、まさに希望に燃えたピカピカの一年生そのものだった。私はまた苦笑いし、そして（あしたからが楽しみ）と心底思った。

三　虹色のなまえ

入学式の翌朝、昇降口の所でまじめそうな顔つきで次々に登校して来る子ども達と〝おはよう〟の挨拶をかわしていると、かわいらしいかっこうをしたKくんが入って来た。

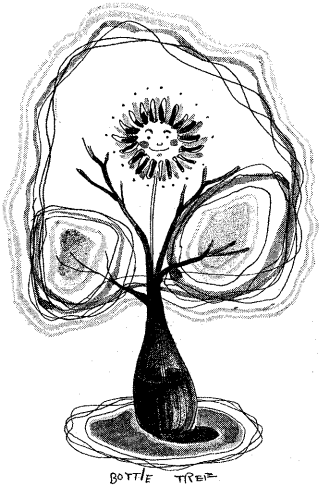
「おはようございます」

と、礼儀正しくご挨拶ができる。今日はだいじょうぶだな。

さて一時間目。私はまずリラックスさせるために、桜の花型に切っておいた画用紙に、パステルで名前を書かせることにした。リラックスといってもそれは教師の一人よがりに過ぎず、初めての課題にみんな緊張ぎみで少し震えるようだった。それでも自分の好きな色のパステルを選んで一生懸命名前を書いていた。

「できた人は先生のところへ持ってきて」

赤、黒、青、黄色……と、突然虹色の桜の花が私の目の前に現われた。〝○○○○○○○〟そこには一文字ごとに色分けしたKくんの名前が書かれていた。書かれていたと言うより、描かれていたと言った方が適切だろうか。やがて二十七枚の桜の花が集まって、大きな桜の木になった。○○○○○○○、強烈な色彩と共に個性の強さを訴えていた。



四　筆箱は持たせないでください

毎朝、〝おはようございます〟のかわいらしい挨拶がかわされるようになってどのぐらいたっただろうか。一年生も大分、学校に慣れてきた。絵を描いたり、学校見学をしたり、歌をうたったり、教科書を使っての学習もするようになっていった。

初めて鉛筆を手にした日、私は文字を書く前に手首をやわらかくさせようと、螺旋状の模様を紙に書かせることにした。鉛筆をそおっと筆箱から取り出して、みんな真剣にぐるぐるやっている。中には少し不器用な子どももいて、所々にとんがり帽子を作ってしまったりしている。Kくんの方をちらっと見ると同じように一生懸命取り組んでいた。クラスをひと回りする頃には、みんなとても上手になってきた。

「次はこの形を書いてみましょう」

と、別の課題を出す。私は、再び一人ひとり指導するためにクラスをひと巡りした。すると、どこからともなくトントコ、トントコという音がしだした。なんとKくんが鉛筆を太鼓のばちのようにして、机をたたいているのだ。私が優しく、

「だめよ」

と注意すると、すぐたたくのをやめるが、またトントコやり出す。飽きてしまったらしい。そればかりではない。どうもよほど太鼓たたきが好きなようで、鏡の前で、陶酔したように、鏡に鉛筆を打ちつけている自分の様子を見つめ出した。注意しようとそばに近づくと、ひゅうっとものすごい速さで席に戻る。で、（今度はちゃんとやるかな）と思って見ていると、なんと鉛筆をかじり出した。

Kくんの鉛筆は、またたく間にかじられてかじられて小さくなっていった。鉛筆は彼にとって太鼓のばちか、食べ物でしかなかった。また、あちこちにばらまいておいて平気だった。そして落とし物箱に○○○○○○○と記名されたちびた鉛筆がたまるよ

うになるのに、そう時間はかからなかった。
学校に慣れるに従って、とがった方を上に向けて周りの子にちょっかいを出すようになったので危険が伴ってきた。教師は子どもの安全を第一に考えなければならない。当時、まだKくんのことをよく理解していなかった私は、悩んだ末に、ともかく連絡帳に〝筆箱は特たせないでください。必要な時、そのつど鉛筆は私が貸しますから〟と書いた。

五　給食を食べない

一年生も、いよいよおやつ程度の給食から本給食に入った。が、Kくんは給食に興味がないらしく、机に本をひろげていることが多かった。私は、ある程度食べないと残して食べさせる主義だったので、彼はいつもお残りになった。それで、清掃に来てくれる六年生の子がおもしろがってKくんを相手にするようになった。

ある日のこと、Kくんはいつものように放課後、私の机で残した給食を目の前にしていた。彼が手にしていたのはとうもろこしだったが、私はそのままにしておき、六年生と一緒に清掃をしていた。すると、六年のある子どもがこう言った。
「先生、Kくんとうもろこしをわざと床に落している」
と。はいてもはいても彼が立っている所にとうもろこしが落ちているので、ようく見ていたら食べたふりをして、一粒一粒口からこぼしていると言うのである。私が、
「Kくん！」
と、とがめると、彼は振りかえってニャッと笑った。そしてばつの悪そうな顔をした。私はKくんの様子から、（これはもう怒れない）とおもわず口元がゆるんでしまった。
彼は、まことに好き嫌いの激しい子であった。その上、食べる量はわずかだった。が、幼児のように

手首などがぷにゃっと肉づき、さわるとふにゃふにゃしてやわらかいのが特徴だった。

六　日曜授業参観

一年生の初めての授業参観日、子ども達はもちろんのこと、私もとても緊張し、題材選びと、授業の運びに心をくだいていた。国語では、少し難しいとは思ったが、物語の読解を取り上げた。『花の道』という題であった。くまさんが歩いてきた所に、こぼした種から花が咲いて、花の道ができたというとてもすてきなお話で、私は気に入ってしまっていた。

当日、お父さん、お母さんが期待に胸をふくらませて、さてうちの子はどうかな、という表情で次から次へと教室に入って来る。そのたびに、あっうちのお父さんだ、誰々ちゃんのお母さんだ、と後ろを振りかえる子ども達。そのうち、入りきれなくなって廊下にまで人があふれてしまい、お母さん方独特のがやがやが始まった。その上、六月ということで少々暑く、子ども達は集中力を欠いてきてしまった。席の座り方もだらっとしており、我が子を見る親の目が厳しくなったのが分かった。

そんな中で、疲れも見せず、はしゃぎきって〝はいはい〟と手を上げている子がいた。Kくんである。席でさされるのを待っているのが耐えられなくなったのか、通路にまで出て来るしまつ。教師である私としては授業が盛り上がるので喜ぶべきなのだが、何となく、Kくんの独壇場となってしまって、（これはまずいな）という気もした。案の定、他の子ども達も父母もしらけてしまったようだ。

『花の道』をそれはそれは上手に、情感たっぷりに読みきったKくんの姿が今でも思い浮かぶが、と同時に、参観後、〝一年二組の先生として、植田先生でだいじょうぶか〟という一部の親のクレームが私のところにまで届いたという苦い思い出も残って

いる。

七　くつもくつ下もいらない

一学期も半ばを過ぎると、気候も大分暑くなった。運動をすると汗ばむ季節。にもかかわらず、一年二組の子ども達はきちんとくつ下をはいて登校

し、上ばきにはきかえて学校生活を送っていた。ただしKくんだけは違っていた。

Kくんときたら、まず、くつがいらなくなった。○○○○○○○と記名された上ばきが床に捨て置かれ、誰々ちゃんが、

「先生、Kくんのくつが落ちていました」

と私に言いにくることも多くなった。Kくんは？と見ると、足を机の上にあげ、くつ下を口にくわえてべろんと伸ばしながら本を読んでいるのが常だった。そのいすにずるっと腰かけた様は、行儀悪さの極致で、もう注意する気もおこらなくなっていた。

続いて彼は、くつ下もぬぎ出した。当時のI小学校の床はピータイルだったので、Kくんのペタペタという足音がいつも耳につくようになった。そしてお帰りの会の時、のろのろしているKくんのランドセルの中に、私や近くの子どもがくつ下をつっこんであげるのが日課となってしまった。後に、彼がLD児と分かった時〝やってあげる〟のではなく、

〝待ってあげる〟のが大切と知り、この点は大きな反省点だと思った。

八　夏休みのプール

さあ、待ちに待った夏休み。I小のプール指導は前・後期に分かれていて、私は前期の大半の指導にあたっていた、が、Kくんは全然現れない。他の子はジョーズごっこなどに興じ、段々黒くなっていくというのに。

八月後半、後期の指導が始まった。夏休みは一年生をうんと成長させた。殊に、背丈がぐんと伸びたようである。ある朝、大いちょうの木の下で受けつけをしていたら、とつぜん、Kくんが〝先生〟と言って現れた。そして夏休みどこへ行ってどんなだったかということを、とりとめなく話し始めた。彼は〝あのね、先生〟と言って話し出すのがくせだったが、しゃべっているうちに興奮し、聞き手の反応などおかまいなしになるのであった。自然と私の頭はかき乱されてしまい、〝ふうん〟とか〝そう〟などという心ない返事になった。が、それでもしゃべり続けるKくんだった。

さて、プールサイドに全員が集合し、準備体操が始まった。続いて体に水をかけ、静かにプールの中へ。Kくんは、先にも述べたとおり、反回神経マヒという病を持っているため、帽子に赤い＋印がついていた。身体面でも行動面でも要注意児童だったので水泳指導では、全校の教師で見ていこうという態勢がとられていた。

ピピッ、A先生の笛の音が鋭くプールサイドに響いた。Kくんが規則を破ったのである。またピピッ、さらにピピッ。サッカーだったら、イエローカードで退場というところである。注意されるたびに、ニヤッと笑い、半分はえかかった大人の歯がお日様にあたって白く輝くのが印象的である。が、彼の場合、規則を守らないというより分かっていない

と言った方が適切かもしれない。

基本の泳法指導が終わり、列を作って二十五メートルを泳ぐことになった。みんな、途中で立ったり、水を飲んで顔をなでたりしながら、なんとか向こう岸にたどり着こうと懸命になっている中、またピピッ。なんと反対方向に泳いでいる子がいた。言うまでもなく、その頭には＋印がはっきりと見えた。

――つづく――

＊

LD児とは

学習障害（Learning Disabilities：LD）児とは、勉強ができない子どもというわけではなく、むしろ学習のし方に独特のものが必要といった子どもを指している。教師が気付かないだけで、一クラスに一人ぐらいはいる可能性が大きい。

ルールが分からなかったり、人の話をとり違えたりするため、集団行動がとれなかったり、友達から仲間外れにされたりすることもある。そのため二次的な障害が表れ、攻撃的になったり、登校拒否などを起こしたりする。

原因としては微細な脳損傷が疑われており、多動、運動障害なども合わせ持つ。運動面では、とりわけ目と手の協応動作を必要とするなわとび、ルールを必要とするドッジボール等が苦手である。

また、空間認知が悪いため、絵画などを苦手とし、紙の使い方にも偏りが見られる。

一般に知能は普通以上で、中にはBright LDと称する非常に高い者もおり、アインシュタイン、エジソンがこの類に入ると言われている。

（元・東京都小学校教諭）

ある日の育児日記から (41)

佐藤　和代

有はもうすぐ二歳。そのわりには、言葉が進歩しません。何しろ私のことを「わんわん」と呼ぶのです。おかあさん→おあーあん→わーわん、ということらしいけど、ちょっとこれを外で呼ばれるとね…。お父さんは「とーあん」。いいなあ。

だいたいの言葉は語尾だけになります。「これ食べる？」「る」といった具合。お友だちは女の子なら「チャン」男の子は「クン」。みんな同じ、便利ね。卵は「まご」お月様が「つたま」、このへんはほとんど謎ときです。

ところで、言葉が遅くて…と言うと、よく「心配ないわよ」とはげまされます。心配なんてしてないのですが、あまりたびたび「心配ない」と言われるので、どうして私心配しないのかしら、と疑問がわいてきました。二人目だから？　こっちの言うことはわかるようだから？　うーん、たぶん、すぐにうるさいくらいよくしゃべるようになると予想がつくから。しゃべる、というのは意志を伝えることでしょ。それなら有はもう得意。手ぶり見ぶり、表情からカタコトまで、使えるもの総動員で訴えます。こんなに言いたいことがいっぱいあるんだから、絶対話せるようになる！　…私の英語学習に欠けていたのはこれね、きっと。

最近ますますそっくり姉弟です。描きわけられなくて困るの。

オランダ便り

子育て事情 in アムステルダム

向山　陽子

一九八九年から一九九三年にかけての四年四か月、夫のオランダ赴任に伴い、娘（渡蘭当時六歳）との家族三人で、アムステルダムに南接するアムステルフェーン市に在住。昨夏帰国しました。

日本人駐在員が急増し、それも学齢に達しない子どもを持つ若い世代の派遣が増える傾向の中でアムステルダム周辺の幼児達、母親達の健気な姿に、多くを感じてきました。

このレポートでは、日本人の多く住む地域に開いた日本語の絵本文庫〝くりんぐ〟の活動が、乳幼児の子育て真最中の母親達の要望で、プレイグループ、医療相談、子育て相談、妊産婦の会へと広がっていった様を報告し、オランダ在住の日本人乳幼児、子育て期の女性達の現状を伝えると共に、海外での子育てを、又、海外での日本人乳幼児の健全な育ちを保障するための援助の必要を訴えたいと思います。

○オランダの五月五日

私共がホテル住まいから、アムステルフェーン市の家に移ったのは四月半ば。引っ越し荷物の片づけ、娘のインターナショナルスクールへの転入と慌ただしい毎日が過ぎた四月末のある日、親切なお隣りの老夫婦と、庭の垣根越しに必死で会話（？）をしました。御主人は、オランダ語とオランダ語訛りの片言英語、御婦人はフリースランド語（オランダ北部の言語）とオランダ語。私は片言英語。

身ぶり手ぶりを混じえて、三割程度の理解度でしょうか。

ブランズマ夫妻が私達に伝えたいのは、「四月三十日は女王の日で、国中でお祝いをするよ。街では子ども達も店を出してよい日で、オープンマーケットがあちこちで開かれ、楽しいから是非行ってらっしゃい。」

私は友好の気持ちをこめて、「ありがとう。楽しみです。オランダの女王誕生日が四月三十日？　日本の、一月に亡くなった昭和天皇の誕生日は二十九日です。一日しか違いませんね。」これだけを伝えるのがどれだけ大変だったか……。ところが、やっと通じたと思った途端、ブランズマさんは険しい顔になり、奥さんにフリースランド語で伝えると、奥さんも、表情を変えて家の中へ入ってしまいました。私は、何か間違って伝わったのではないかと心配になりました。ブランズマさんは険しい顔で「ヒロヒトか？　私はヒロヒトは大嫌いだ」と言うではありませんか。知り合って間もない人の口から「大嫌い」という強い言葉を聞いただけでも動揺している私を察して、彼は「今度の天皇、アキヒトはどんな人間だ？」と、笑顔を作って尋ねました。

渡蘭当時の私は「エンペラー・ヒロヒト」の意味する所など、まったく無知だったのです。

そして……五月五日が近づきました。

〝鯉のぼりを立てないように〟〝五月四日（終戦記念日）五月五日（解放記念日）は、アムステルダム中心街へは、日本人は近づかないように〟と、夫が情報を持ち

帰りました。

オランダでは、オランダ国旗以外の旗の掲揚は禁じられており、ヒットラー率いるドイツ軍との終戦、ドイツ軍がオランダ国外へ撤退した記念日に、日本人が、国旗でなくとも、又、真意は子供の成長を願うものであっても〝のぼり〟（幟・戦意高揚を目的とする旗でもあった）を掲げる事が誤解を生む事は必至でしょう。

そして、五月四日、五日の記念日は、オランダ国民にとっては、国が自分達の国になった祝日。中心街ではお祭り騒ぎになるだろう。そんな高揚した気分の中に日本人を見たら、何が起こるか保障できない、と警察から、親切に注意報が入ったそうです。

事実、友人の家の庭の大木二本が、五月四日の夜、切り倒され、二歳の女児を持つ若夫婦は恐ろしい夜を過ごしたと話してくれました。

又、オルガンの勉強に来ている女子留学生は、アムステルダムの下町に住んでおり、中心街を通って学校へ行く途中、ダム広場で、日本に対する、オランダ人捕虜、慰安婦の補償請求のデモ隊に会い、口汚なくののしられ、唾をかけられたが、下を向いて立ち去るしかなかったと話してくれました。

家で静かに過ごした私達も、日本での子どもの日とは、似ても似つかない緊張の両日でした。というのは、テレビをつけると、朝から晩まで、ずっと、第二次世界大戦中のフィルムが流れているのです。日本では見たことのない映像ばかりです。ドイツ軍の行為は勿論の事、インドネシアでの日本軍の行為を収めた映像も流れます。正直、私にとって、あんなに汚れた日の丸を見たのは、初めてでした。

以上が、オランダで迎えた、初めての「子どもの日、五月五日」でした。

オランダでも雛まつりにはお雛様を飾ろう、子どもの日には、七夕には、お月見には、七五三には……と、日本にいれば味わえる子どもの行事を、できるだけ体験さ

せてやろうと、張り切っていた私には、この初めてのオランダでの子どもの日は強烈な記憶となりました。

この「子どもの日、五月五日」という事実は、以後、東ヨーロッパの激変、湾岸戦争等の世界の動きの中で、それぞれの国の、民族の文化重視へと世相が変化し、又、経済力、教育力のある日本コミュニティが注目され、日本文化紹介があちらこちらの学校で紹介される時も、日本人の頭痛の種となりました。

子どもの育ちを大切にしてきた日本文化を紹介するには「五月五日・子どもの日」が最適なのですが……三月三日・雛祭り、十一月十五日・七五三を先に紹介したものです。

オランダは、外国人に対して寛容で、家族を大切にするし、食物も日本人にはなじみ易く、駐在するには良い国といわれます。

又、事実、のんびりと子育てをするには良い国のように思われます。

日本にいる時よりも、夫婦で子育てをしている実感がある、夫婦で教育問題についてよく話し合ったと、家族の絆を深め、家族一人ひとりの心の歴史を刻み込む場として良しとされる外地の中でも、恵まれた国のようです。

そのオランダで、幼児期の子どもの育児を体験したAさんとBさんの例から、海外での育児に対して、何を援助していくべきかを、考えていきたく思います。

経済活動の国際化を背景にして、好むと好まざるとに関わらず、異国での子育てに挑む日本人家庭、とりわけ主たる担い手である、女性達は増え続けているのですから。

○アムステルダムでの子育て

Aさんは一歳六か月の女児（Mちゃん）と共に、夫の赴任に伴って、渡蘭しました。活動的なAさんは、当

時、手持ちの本を持ち寄り、居間を解放して行っていた〝くりんぐ文庫（※1）〟に参加。午前中の〝ちびくりんぐ（※2）〟のメンバーになりました。又、近くの子育て仲間とも、週一回、自宅を順番に解放して遊ぶ会を作り、「オランダ時代は私の子育て期」とわり切って、Mちゃんと楽しく過ごそうと思うと生き生きと話してくれたのを思い出します。

くりんぐ文庫　子どもの日のつどい

そのAさんも、Mちゃんの育ちに関していろいろと悩むことになります。

Ⓐ　オランダの医療に関して

(1)予防接種制度の違いから来る不安

(2)医療制度（ホームドクター制）の違いから来る不安

(3)ドクターの処置への不安、疑問等々……

Ⓑ　気候・風土・習慣の違いに関して

(1)一年の半分以上が曇り、冬の長いオランダでの日光浴不足、ビタミン不足等の心配

(2)太陽が出ると外で遊ばせたいが、砂場、池などの衛生上の心配。（なにしろ、道、芝生、公園などには、犬の糞だらけ。子どもより犬の方が優遇されているのでは？　と思ってしまう光景多々あり。）

(3)オランダは野菜の種類が多く、魚も手に入れ易くて助かるが、馴染みのある材料に片寄り易い。少しアレルギーのあるMちゃんのために、オランダでのアレルギー対策として、又、鶏卵、牛肉、魚等の検査基準等、食物に関する知識を得たい。

(4)夫婦単位の生活は良い面も多いが、夜の会に、夫婦で招待される事が多く困る。日本人は心情として簡単にベビーシッターに頼めない。等々。

© Mちゃんの育ちに関して

(1)言葉の発達が遅いのでは？

日本語のビデオを流し、夫婦とも意識してMちゃんと話すように心がけているが、活動的なMちゃんは、絵本などにも余り興味を示さず、なかなか日本語が出てこない。家の外では、オランダ語ばかりが耳から入るので不安がある。

(2)日本語で遊ぶ場がもっと欲しいと、近所の遊ぶ会の回数を増やしたいが、活発なMちゃんの行動は、他のお宅では、母親が疲れてしまう。つくづく日本での児童館のような場が欲しいと思う。

(3)Mちゃんが三歳になって、もう、自宅だけでは、活発なMちゃんは満足できないので、オランダのナースリーに入った。楽しく、広い場所で遊んでいるが、先生とコミュニケーションがとれずに一日が終わる。日本人幼児二人だけが好き勝手に遊び、先生もいろいろと試みるが、あきらめている面もあるようだ。

(4)三歳を過ぎたMちゃんの言葉の心配

言葉が遅いと気になりながらも少しずつ発語するようになったMちゃんだが、発音が不明瞭、語いがなかなか増えないと、言葉に関する心配はつきない。三週間の日本への一時帰国の際、びっくりする程、語いが増えたにもかかわらず、オランダに戻ってからは、又元に戻ってしまった。

Bさんは、四歳二か月の男児Y君と、二歳半の女児Sちゃんと渡蘭。Bさん母子は、午前の〝ちびくりんぐ〟

にはSちゃんのために、午後の〝くりんぐ文庫〟は、Y君のためにと、顔を出してくれました。Bさんの悩みは主として、Y君のオランダの幼稚園への適応問題でした。

Y君は日本の幼稚園でもすぐには馴染まなかった様ですが、ごく普通の過程を経て、一学期後半には楽しんで通園していたようです。せっかく慣れた日本の幼稚園を後にしてオランダに着いた当初は、急がずにゆっくりと馴染んでいこうとしているとおっしゃる通り、母子三人寄りそっていらっしゃいました。Y君は、絵本が好きで、語いも豊富。コミュニケーションがとれると、どんどん話してくれて、想像力も豊かな、知的な、楽しみな男児です。ところがこのY君が、オランダの幼稚園に馴染まないというのです。

考えてみれば当然の事。Y君のように日本語の能力が高く、日本語で友人関係も、自らの知的世界でも存分に遊ぶ事のできる幼児が、急にオランダ語の世界に馴染めと言われるのが無理な話。Y君は登園拒否。Bさんは、〝他にも同じ年頃の日本人幼児がいるが、拒否はしないまでも、日本人だけで勝手に遊んでいる。Yに無理に行けとは言わないが、オランダでは五歳から義務教育なのでどこかに在籍しなくてはならない。日本人学校は、当然の事ながら六歳就学。五歳児の日本人幼児の事を考えてほしい〟と訴えておられます。

Aさん、Bさんの悩みは、アムステルダム周辺の幼児を持つ家庭の悩みの典型です。

〝ちびくり〟、〝くりんぐ文庫〟の活動の中で、多くのAさん、Bさんの声を聞きました。幼い子を持つ夫婦がまず心配なのは医療の事。次が保健、教育、そして、子育て全般の心理的なサポートがほしいのです。

〝くりんぐ〟では、医療面、カウンセリング面に、有能な協力者を得、日本人小児科医による医療相談、子育てカウンセリングを定期的に開くことができ、子育て期の方々の「心の安全基地」となれたのでは？　と自負しています。加えて、オランダでお産をする日本人が集まって、オランダのお産事情や、経験の情報交換をする会も

でき、その会にも日本人助産婦が話しに来てくれています。

○今後の課題

渡蘭前、海外子女教育に関しては、本も読み、話も聞きました。が、海外での育児に関しては、「家庭がしっかりしていれば、帰国後で十分補える」と耳にするばかり。何を、どのように補えるのか？　と質問しましたが、納得できる答ではなかったと記憶しています。くりんぐ文庫を開き、援助を在蘭日本商工会議所にお願いするに当たり、在蘭幼児数を知りたいと大使館に問い合わせたところ、義務教育課程の就学児数しかわからないし、調査する予定もないとの返事に、在外幼児の問題、育児期の母親達の抱える問題は、社会の視野の外に置かれていることを痛感しました。

昨今、アムステルダムのくりんぐの活動だけでなく、世界のあちらこちらでの文庫活動をはじめ、育児を支え合う、母親達のサークル活動の話を耳にします。

当事者である母親達の活動を心から支援する者として、国際化時代の育児を支えるネットワーキングが充実し、海外の幼い日本人の子ども達が、より豊かな幼児期を過ごせるよう、医療、保健、教育、保育分野の専門家の方々へ、在外育児への関心を喚起していただきたく思います。

※1　くりんぐ文庫……「オランダに住む日本の幼い子ども達に、日本語で、良い絵本を読み聞かせたい。日本の歌や行事に親しませたい」という母親達の願いと熱意が基になり一九九一年一月オープン。現在会員一四〇名。蔵書一五〇〇冊。

※2　ちびくりんぐ（後に、ちびっこクラブに改称）……二歳前後の幼児と母親の自主プレイサークル。絵本読みと手遊びが必ず入る。

オランダで子育てする日本のお母さんたちに広がる〝くりんぐ〟の輪

最近、学齢に達しない子供をもつ若い世代が海外駐在に派遣される傾向があり、海外での幼児教育が問題化しつつある。中でも、ことばの発達に大切な幼児期を外国の限られた社会環境でいかに過ごさせるかは大きな悩みである。

そうした悩みを克服したいと願う母親たちが、日本で幼稚園教諭として経験を積んだ向山陽子さんと共に2年前〝くりんぐ文庫〟を開いた。手持ちの本を持ち寄り、居間から始まったこの子供文庫は、アムステルフェーンにある欧州囲碁センターに書庫を持つまでとなり、会員も140名にまで膨らんだ。絵本や本の貸出、読み聞かせ、母と子のサークル、バザー、季節の行事等の活動を行っている。

この〝くりんぐ〟の輪は、他の面でも母親たちのさまざまな自主活動を生み、広がってきた。医療面では帝京メディカルセンター小児科医の中里先生を囲んで定期的な座談会を開き、精神面では日本人カウンセラーの協力を得て、悩み相談室を設けている。またオランダで妊娠出産するケースも多く、日本と異なるオランダの医療保険体制の理解を深めようと情報収集も進行中である。

昨年10月には、母と子の日本語プレイサークル（1～4歳）がアムステルフェーンの〝ロバブルグ〟で始まったほか、最近とみに日本人が増えてきたアウトホールンにも〝木ぐつ文庫〟〝スペル・オ・テーク（おもちゃのある遊戯室）〟等、日本人の子供たち対象のサークルがある。

オランダで初めて文庫を開いた加藤千穂子さんは「図書館もスペル・オ・テークも日本人の悩みを話すと快く場を提供してくれました。オランダ人の外国人に対する寛大さ、本当の優しさを感じずにはいられません」と語る。

これからオランダに赴任される方々にぜひご紹介したい自主活動だ。

問い合わせ：アムステルダム日本商工会議所

（ＫＬＭオランダ航空、機内誌ウィンドミル　'93．７．）

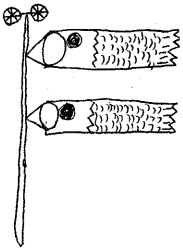
編集後記

我が家の息子、念願のマウンテンバイクを買ってもらった。ほしくてたまらなかったものだったので、うれしくて毎日、友だちの家に行くのも、ちょっとの距離も乗って行く。所が、せっかくの自転車が……。

六年間通っていたスイミングクラブを去年の秋に退会した。もともと太り気味ではあったのだが、やめた途端に、ますます太ってきた。一週間に三日程、二時間ずつ泳いでいた効果は大きかったようだ。お正月を越して、冬の間の運動不足も重なって……学年末の体重測定の時に、ついに〝肥満〟の領域に入ってしまった。さすがの息子も少々気にしているようだ。

甘い物はひかえめに、大好きなカレーライスもおかわりは一回でやめた。マウンテンバイクは？　あれは坂道が楽に登れる。ということは、あまり運動にならないことに気がついた。最近、徒歩作戦に変えたようだ。自転車は遠くに行く時以外は乗らないことにしたそうだ。いいことだ、歩くことは、足腰もきたえられるし…。あれこれ努力しているように見えたが、相変わらず、よく食べることには変わりはない。育ち盛りなのだから仕方がないだろう。せめて100回位よく噛んで、ゆっくり食べようね!!

（K）



幼児の教育

第九十三巻　第五号
（一九九四年五月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成六年五月一日
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替口座　東京九―一九六四〇

☆本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

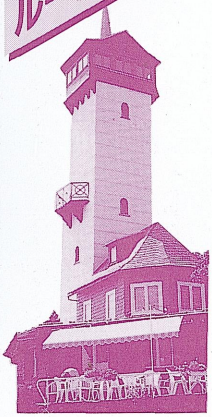
◆フレーベル館特別企画◆

ヨーロッパ幼児教育視察

—フレーベル先生の遺跡と教育施設をたずねる—

7月26日（火）～ 8月6日（土） 全12日間

幼児教育のルーツを訪ねて



高原の町
オーベルバイスバッハにて**フレーベル先生の生家**や**フレーベルタワー、フレーベル記念館**などを見学。
また、フレーベル生誕200年を記念して新設されたモデル幼稚園も訪問予定。

美しい森に包まれた町バードブランケンブルクで世界最初の幼稚園「**フレーベル幼稚園**」を見学。
他に**フレーベル先生住居跡、フレーベル博物館**などを見学。

●幼児教育発祥の地を訪ねてロマンチック街道を専用バスで行く快適な旅。ドイツ中世の面影をとどめた街並みや美しい森を満喫！
●スイスでは雄大なアルプスの景観を眺め、湖畔の静かな町チューリッヒでペスタロッチの博物館などを見学。
●そして、美術館、遺跡など見どころいっぱいのイタリアへ。街全体が博物館といわれるローマまで足を延ばします。

募集人員 25名 定員になり次第締切らせていただきます

旅行代金 768,000円 おとな1名

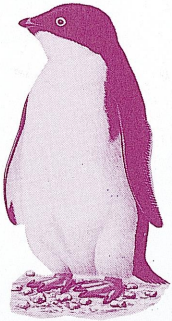
◆旅行代金に含まれているもの(抜粋)
○航空運賃○視察費用○全行程の通訳費用○ホテル料金○日程記載の食事代○各地における空港税○全行程のバス運賃○各都市における観光バス・ガイド及び入場料金○団体行動中のチップ及びサービス料

申込締切日 1994年5月31日

■企画・お問い合わせ：フレーベル館・ヨーロッパ幼児教育視察係
〒113 東京都文京区本駒込6-14-9 ☎ 03-5395-6600（代）

■旅行主催：日本交通公社
全行程に日本交通公社社員が同行致します。

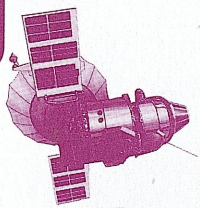
幼児の探究心を育てる図鑑、小学校の「生活科」にも役立つ。



ふしぎがわかる しぜん図鑑

全10巻 完結

監修　東京大学名誉教授　水野丈夫



●第1巻
こんちゅう
監修　元東京都多摩動物公園園長　矢島　稔

●第2巻
どうぶつ
監修　東京都上野動物園園長　増井光子

●第3巻
しょくぶつ
監修　園芸研究家　浅山英一

●第4巻
みずのいきもの
監修　国立科学博物館　武田正倫

●第5巻
とり
監修　東邦大学理学部　長谷川　博

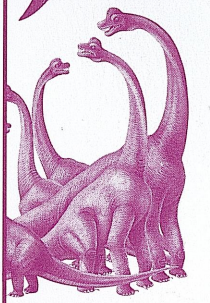
●第6巻
ひとのからだ
監修　愛育病院小児科部長　岡本　曉

●第7巻
きょうりゅうとおおむかしのいきもの
監修　国立科学博物館　小畠郁生

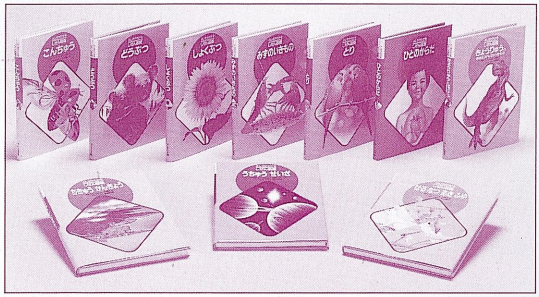
●第8巻 新刊
ちきゅうかんきょう
監修　放送大学教授　奈須紀幸

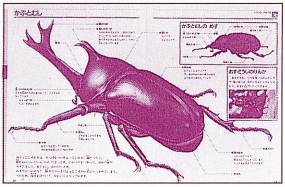
●第9巻 新刊
うちゅうせいざ
監修　五島プラネタリウム館長　村山定男

●第10巻 新刊
はるなつあきふゆ
監修　理科教育研究家　中山周平



A4判・上製本・本文116頁・定価各2,000円（税込）





- ●スーパーリアリズムのワイドな画面によって自然界への関心を高め、そのふしぎさに気づいていきます。
- ●基本的な図鑑としての役割を十分にはたしながら、子どもたちの探究心や科学する心を育てます。
- ●なぜだろう、どうしてだろうといった疑問に答える記事もとりあげました。豊富な写真とイラストを組み合わせで、眺めるだけでも楽しい構成です。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部 03（5395）6608（代）にお問い合せください。

キンダーブックの
フレーベル館